



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら
2

松 原 至 大

2 黒ん坊のナポレオンちゃんとお歌のおばさん

ある日のこと、ナポレオンちゃんがお父さんのことですよ。と、いつしよに暮している小さなお家の裏口に腰をかけて——泣きたくなるのを堪えていました。

「どうしてそんなに、しよげているの？」と、マミーがたずねました。マミーは裏庭の木の所で、しよぼんを作っていました。ナポレオンちゃんは、大きな黒いおなべの下を燃すたき木を集めたのでした。いつもナポレオンちゃんは、マミーが豚のあぶらにアルカリ液を注いで、ポットの底からしよぼんが泡立つてくるのを見るのが好きでした。けれどもその日は、入口のステツプに腰をかけて、ぼんやりしているのです。

「ねえ。」やつとので、ナポレオンちゃんが口を開きました。「なんにもかわつたことがないや。しよぼんと、どうもろこしの粉を作つて、綿の實をひろつて、ひよ子にえさをやつて、たき木をあつめて、爐をきれいにして」「まあ、坊やは。」とマミーは、しよぼんをかきまわしたので、アルカリ液の強い香にむせて、軽いせきをしながら言いました。「そんな事では幸福になれませんか。そう考えるのは、あなただけです。私のところへいらつしやい。」ナポレオンちゃんは、しよぶしよとマミーの方へ、足をひきずつて行きました。マミーは元氣なくたれ下つたナポレオンちゃんのお口の両はじを指でおさえて、こう言いました。

「面白い思ひつきが、笑いでこのところを元氣にしてくれて、ひとりで歌が出てくるものよ。そうすれば、なんでもあなたの思ひつきが、都合よくなつてきますよ。」

ナポレオンちゃんはいつこり笑つてくちびるを持ちあげました。マミーが教えて下さつた昔の歌をうたいながら、やつとこさつと、そこをはなれました。

「かえるが、びよんびよん行きました。

お馬みたいに行きました——

ううふんふん、ううふんふん。

劍とピストルぶらさげて、

ううふんふん、ううふんふん。」

ナポレオンちゃんは、だんだん御きげんになりました。口の兩はしが、はつてきました。やがて古いかき根の權棒の上にのぼつて、茶色のかかとでかき根をたたきながら、ありたけの聲で、その先を歌いました。

「お馬みたいにきたところは、

ねずみさんのおげんかん、

ううふんふん、ううふんふん。

三度はこつこつ、

一度は大どなり、

ううふんふん、ううふんふん。」

ナポレオンちゃんがあまり大きな音をたてたものから、路を馬が走つてきたのに気がつきませんでした。それが自分の後にとまつたのにも、気がつきませんでした。そして「坊やもう一度その歌をうたつて下さない？」と言われた時は、驚きのあまり、かき根の上から落ちそうになりました。

ナポレオンちゃんは、かき根をはいおりて、一人のきれいな笑い顔のおばさんを見つめました。ナポレオンちゃんは、あまり白人さんを見たことがありません。それにまたこのおばさんは、すばらしく美しい人だったので、びっくりしました。そのおばさんは、乗馬服を着ていました。馬の上から、また言いました。

「あの歌、うたつて下さない？」

ナポレオンちゃんは、茶色の足指を、砂の中で動かしながら答えました。

「ぼく、みんなは知りません。ぼくのマーミが知っていますよ。」

そのおばさんは馬からひらりとおりて、

「お母さんのところへ連れてつて下さない？」と言いました。

そこでナポレオンちゃんは大いばりで、そのきれいなおばさんと手をつないで、お家へあんないしました。馬は二人の後からついてきました。

そのおばさんはナポレオンちゃんのマーミに、黒ん坊さんの昔の民謡を集めて、本にするため、アメリカの南部をまわつて歩いていたので、「歌のおばさん」といわれているのだと語りました。その中に、世界中の人が、その歌をうたうようになつて、その楽しい幸福な音楽のために、黒ん坊さん達にみんながとても感謝するようになりましょう。

それを聞いてナポレオンちゃんのマーミは、かえるとねずみの結婚式をうたつた歌の残りを歌いました。「歌のおばさん」は、それを書きとめました。ナポレオンちゃんも、最後の歌をいつしよにうたいました。

「パンとチーズがありました、
たなの上ですよ、

ううふんふん、ううふんふん。

もしもつとほしいなら、

自由にとつておたべなさい、

ううふんふん、ううふんふん。」

やがて「歌のおばさん」は、歸つて行く前に、ナポレオンちゃんをお膝の上のせて、この民謡は、すべての人に黒ん坊さんというものを、もつとよくわからせるのに役立つということをお話いたしました。

その夕方、ナポレオンちゃんはとても元氣に、にこにこして、たき木を運んだり爐を掃除したり、ひよ子にえさをやつたりして働きました。子牛のレット・スターに綿の質の御飯を持つて行つた時、ナポレオンちゃんは、そのぴんとはつた耳に、こう歌つてやりました。

「レット・スターや、

ぼくは、みんなのためにつくしたよ。

歌をうたつて——名譽に輝いたよ。

ぼくは笑つて、歌つたよ。

マーミがおつしやつた通り。

そしたら、なんでもよくなつた。」

(ベス・バウトウエル女史の作による)